

審査概要

令和三年度の文部科学大臣賞の選考は、令和二年四月から同三年三月に至る一年間に刊行された俳文学（連歌・俳諧・俳句）に関する出版物から、学術賞の対象としてとりあげらるるものに七点を厳選し、選考委員六名による慎重なる査読と審議の結果、天理大学附属天理図書館編『連歌俳諧 全六巻』（新天理図書館善本叢書第5期、八木書店刊）を最もすぐれた編著として推薦することに決定した。

本叢書は連歌巻子本集として二巻、西鶴自筆本集として一巻、芭蕉集（自筆本・鯉屋物）として一巻、蕪村集としての二巻からなる原典の集成で、連歌から貞門・談林俳諧を経て、蕉風から中興俳諧へと続く系統立った編集がなされ、あたかも文学史の頂点をたどる如き内容を持つ。

すなわち、連歌資料二巻の大半は、通称「水無瀬三吟」の名で知られる室町連歌代表作『賦何人連歌百韻』をはじめとする二十二点の百韻で、公家の三條西実隆、宗祇の高弟宗長、連歌界の第一人者里村紹巴、その紹巴に養育された昌叱、紹巴の次男玄仲、細川藤孝（幽斎）、西山宗因などの筆蹟を保証する巻物。他に画家で連歌七賢の一人でもある能阿自筆の連歌句集『集百句之連歌』、紹巴筆の連歌学書『初学用捨抄』を含む室町後期の名品の集成で、尾崎千佳氏の解題を添える。

西鶴自筆本集は、先行作法書との関係が興味深い秘伝書『俳諧之口伝』、西鶴自ら談林派即吟の模範という『胴骨三百韻』、その俳諧観がうかがえる『西鶴評点政昌等三吟百韻巻』や『西鶴独吟百韻自註絵巻』を中心に、絵画と発句の不即不離の味わいを創出する画賛、発句短冊などを収める。更に尾張国鳴海宿（名古屋市緑区）の庄屋で、多くの文化人との交流が知られる下里勘兵衛（知足・寂照）に宛てた書簡を加える集成で、大橋正叔氏の解題を添える。

芭蕉集は、江戸に下った芭蕉の最古参の弟子の一人で、終生芭蕉の後ろ盾であった鯉屋市兵衛、すなわち杉山杉風家伝来の、いわゆる鯉屋物と呼ばれる資料。『野ざらし紀行』『鹿島紀行』をはじめ、数多くの発句短冊や色紙や詠草、さらに懐紙などを加え、「蓑虫の音を聞きに来よ草の庵」という秀吟の周辺資料、門下に宛てた芭蕉書簡、門人許六が描く「奥の細道行脚之図」などを含み、大橋氏の解題がある。

蕪村集の二巻は門人寺村百池の家に伝来した記録類で、長く所在不明ゆえにペン書きの写本に頼らざるを得なかった蕪村資料の原本。すなわち、月次発句会の記録『夏より三葉社中句集』、『高德院発句会』、『月並発句帖』と、発句会における選句の基準や態度

を定めた「取句法」を収め、更に昭和九年六月号の『俳句研究』（改造社）で乾鯨平が発見報告をしたものの、詳細には及ばなかった『夜半亭蕪村句集』の全体を紹介し、牛見正和氏の解題を添える。

本叢書の性格を一言でいえば稀覯本である。つまり、かつて特定の所蔵者のもとにあって、研究者が望んでも、閲覧が容易ではなかった書物である。なかに実見の機会に恵まれる者が出て、手書きで写したり、活字に置き換えたりされたものを含むが、ひとたび誤写や誤読の不安を抱えても、その確認は難しかった貴重本である。連歌における新出資料や、はじめて全貌を明らかにした『夜半亭蕪村句集』の価値は言うまでもないが、なにより、これらが公共、民間を問わず、各地の図書館に配架され、研究者の書架に並ぶ時代が来たことを思うとき、本書が俳文学研究に裨益するところはきわめて大きい。

以上の点から、新天理図書館善本叢書第5期『連歌俳諧 全六巻』を、今年度の文部科学大臣賞に最もふさわしい書物として推薦するものである。

令和三年八月十三日

文部科学大臣賞選考委員会

委員長 谷地 快一